

AJIBI News

vol.
97

あじびニュース

展覧会を
面白くする
仕掛けとは？



福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

AJIBI Discuss

あじびのこと話そう

#04

展覧会の「仕掛け」

あじびのコレクション展は集合知

春と秋の2回にわたり、異なるテーマで所蔵作品を楽しめるあじびのコレクション展。4～6月に行われた春展「アジアコレクション この手が未来を編み直す」と、現在開催中の秋展「ベストコレクションIIIー変革の時代、新たなる自画像」に込めた思いを担当者たちが語ります。

五十嵐（以下 五） あじびのコレクション展は、約5,700点の所蔵作品から単にピックアップして展示するというスタイルではなく、特別展のようにしっかりと演出する点が特徴的です。ここ2年で、テーマを設ける春展と、作家にフォーカスする秋展という構成が定着しましたね。

佐々木（以下 佐） 毎回違った形で見ごたえのある展示を構成できるのは、質・量ともに骨太な作品が揃っているからこそ。そして、一つひとつのコレクション展にここまで力を注ぐ美術館は、今の日本では珍しいかもしれません。

五 最近は空間づくりに使う予算を確保して空間デザインのコンペをし、外部のプロの力をとり入れています。昔は学芸員が図面を引いて、パネルもDIYしていたけどね。

佐 空間デザインや施工の専門家からは、学芸員だけで考えていても出てこないような発想やデザインの提案をいただくこともけっこうありますよね。展覧会ごとに作品の見せ方や空間の使い方が大きく異なるので、それも現在のあじびのコレクション展の見どころの一つになっていると思います。



「アジアコレクション この手が未来を編み直す」会場



撮影：長野聡



社会のうごめきから
生まれた熱量を空間ごと体感する。

SNS時代だからこそ身体的な経験を

佐 五十嵐さんがキュレーションを担当した春展は来場者の反応がとてもよかったですね。

五 一つ前の秋展が映像やインスタレーションが多かったので、春展は作品の「もの」としての手ざわりを伝えられるように意識しました。じっくり見ていただけたようで、帰りに受付でわざわざ「すごくよかった!」と仰ってくださいる方もいらっしゃいました。今までにない反応が見られて嬉しかったです。

佐 会場となるアジアギャラリーの全体、約1,000㎡を使って展開したのも、これまでとは違った試みでした。

五 こだわったのは身体的な経験となる空間づくりです。まずは小部屋に刺繍などの細かい作品を展示して、ぎゅっと近い距離で味わっていただく。そして天井の高い部屋に出ると空間がパッと開けて、作品との距離は遠くなり、キラキラしたり揺れたりしている複数の作品に包まれる。そんな風に、SNS時代だからこそ、その場所に来ないと経験できない展覧会にしたかったんです。

作家の「個」が引き立つ空間づくり

五 今開催している佐々木さん担当の秋展は、80～90年代に頭角を現した作家に焦点を当てていますね。

佐 この年代は、アジアの多くの地域で政治の自由化や経済の発展が進んだ時代にあたります。アジア美術にとっても「変革の時代」であり、西洋美術の模倣や古典の反復を超えて、アジア各地からそれぞれの地域の独自性を主張するような表現が登場してきます。自分は学生の時、この年代の中国のことを主に研究していましたが、状況がダイナミックに動いていく中から、さまざまなスター作家が登場してくる非常におもしろい時代です。今回出展しているファン・リージュン（方力鈞）も、この時代に頭角を現した一人。90年代には中国の作家も批評家も、自分たちの活動の価値を国際的な場で「プレゼンテーション」する意識を持つようになってくるのですが、彼は中国の現代美術が国際的に認知されていくうえで、非常にシンボリックな役割を果たしました。

五 空間づくりのこだわりは？

佐 いわゆるホワイトキューブ的な空間ではなく、動きのある壁を立てたり、作家ごとに明暗の差を出したりと、変化があって「個」が引き立つ空間を目指しました。

佐々木玄太郎（学芸員）



「ベストコレクションIII」準備中の会場



展示風景（ヘリ・ドノ）

アジア美術を通して美術の概念を問い直す

五 メインビジュアルに使われているハン・ティ・ファムの《自画像・ロングヘア・パイプ》も印象的です。

佐 秋展のタイトルに掲げている「新たなる自画像」とは、必ずしも肖像画だけを指すわけではありません。自身のアイデンティティや自らが生きる社会の現実をこれまでにない形で表現する、“広義の自画像”というイメージです。ハン・ティ・ファムはベトナム戦争が終わる間際に難民として出身地のベトナムからアメリカへ渡った作家で、アメリカの中のアジア人であり、女性であり、レズビアンという多重なマイノリティの立場にある人。彼女が表現する自画像は、清楚な白のアオザイに女性らしいロングヘアなんだけど、西洋人男性を思わせるパイプを手に、まっすぐな眼差しをこちらに向けています。逆境の中でも、ステレオタイプな視線と正面から対峙し、自身を貫く確固たる意志を示すという、今回の秋展を象徴する作品の一つです。



展示風景（ハン・ティ・ファム）

コレクション展
Collection Exhibition Best Collection III

ベスト コレクションⅢ

変革の時代、新たなる自画像

7.5[土]～11.30[日]

会場：アジアギャラリー〔7階〕
観覧料：一般200円、高大生150円、中学生以下無料
主催：福岡アジア美術館

スター作家の傑作が一堂に会する「ベストコレクション」展。展示面積も作品点数も過去最大規模となる第3弾では、1980～90年代に頭角を現した作家を中心に、11組による作品を出展。アジア美術が躍進を遂げる時代に生まれた名作の数々をご覧ください。



展示風景（ナヴジョード、ラジクマル、シャンティバイ、ガスラム）

五 一人の作家の初期と近年の作品を同時に見られるのも面白いところですね。例えば、ウォン・ホイチョンが89年に描いた《粛清》と09年の映像作品《暗い穴》は日本占領下のマレー半島における華僑粛清という同じテーマを扱っていますが、時代を経て見方が大きく変化していることがわかる。作品が宇宙に漂う一点としてポチッとあるのではなく、歴史的な流れや社会の広がりの中に位置づけることができるのもあじびの強みだと思います。どんな社会の中であごめいてその作品が生まれたのかも含めて解釈しないと、本当の意味での「美術」は見えてこない。今回の秋展は、アジア美術を通して美術の概念を問い直すことにも繋がるんじゃないでしょうか。

佐 「自身のアイデンティティとは何か」「西洋とは異なる自分たちの独自性とは何か」といった時代の問題意識が、会場のあちこちで感じられるのではと思います。力のある作品が揃っていて一発一発のパンチが重いので、一度見ただけでは消化不良になるかもしれませんが、その重厚感も含めて楽しんでいただけたらいいなと思っています。

特別企画展

ベトナム、記憶の風景

記憶とは、ふとフラッシュバックしたり重なり合ったりするもの。
ベトナムの歴史や記憶をめぐる時間軸は直線だけでは語れません。

植民地支配と急激な近代化、二度の戦争、南北統一と難民の発生、経済開放とグローバル化。あらゆる課題を絶えず経験してきたベトナムの歴史は、現代世界の縮図とも言えます。ベトナム戦争終結50周年を迎えた今年、近代から現代までの約100年間のベトナム美術作品を集め、これまで可視化されることのなかった激動の歩みを浮かび上がらせます。

記憶とは、ふとした時にフラッシュバッ



ディン・キュー・レ《南シナ海ビシュクン》2009年、アニメーション



ゴック・ナウ《静夜一月曜日》2021年、
アクリルシートに印刷された写真、木、ライトボックス

（※）展示構成

第1章「理想一描かれた祖国のイメージ」

第2章「熱気一駆け巡る戦場のリアル」

第3章「発展と郷愁一変わりゆく故郷のすがた」

第4章「追憶一歴史を携えて生きること」

クしたり重なり合ったりするもの。決して直線だけでは語れないこの国の、時に痛みを伴う歴史や記憶を伝えるため、作品の並びはあえて完全な時系列にはしていません。展示の構成は、第1章～第4章に分かれ（※）、例えば2章では、ベトナム戦争時代にベトナムの作家によって作られたポスターや写真とともにディン・キュー・レの現代美術も紹介しています。戦火を逃れるために10歳でベトナムからアメリカに渡った彼は、ハリウッド映画

日本人コレクターが集めたベトナム美術には、
ベトナムの風景に自身の思い出を重ねるような特別な思いを感じます。

第二次世界大戦中、日本はフランスとともにベトナムを支配し、60年代半ば～後半にはベトナム戦争に反対する反戦運動が盛り上がりました。そして近年は政治、経済、文化などの幅広い分野で友好関係が築かれ、日本には多くのベトナムの方々が暮らしています。時代ごとにさまざまなかたちでベトナムに関わってきた日本人の中には、ベトナムの風景に自身の

などで描かれるアメリカ的視点のベトナム戦争に違和感を覚え、ベトナム戦争の象徴的な存在である米軍のヘリコプターを皮肉を込めて作品の中に登場させています。惜しくも2024年に急逝しましたが、ベトナム現代美術の発展に大きく貢献した彼の思いは、未来を眼差すきっかけを私たちに与えてくれます。

思い出を重ね、特別なシンパシーを抱いてきた人もいます。本展では、日本人コレクターからお借りした美術作品も展示します。個々の作品の素晴らしさだけでなく、二国間の人々の情緒的な繋がりも感じとることができるはずです。

今、みなさんが思い浮かべるベトナムはどんな姿ですか？ 美味しい食事、活気あふれる市場、高温多湿な気候などで

しょうか。本展で描かれるベトナムの情景はもっと複雑で多面的です。ベトナム人作家が模索した理想の祖国、力強い人民の姿をアピールするポスター、都市の変化と人々の逞しさを捉えた立体作品、個人の秘められた記憶から歴史を語り直す現代美術。多様な作品を通して、ベトナムのイメージに新たな魅力が加わることを願っています。

萩原ふみ（学芸員）



ルオン・スアン・ニー《読書する若い娘》1940年、油彩・画布

特別企画展

ベトナム、記憶の風景

Special Exhibition Vietnam, The Landscape of Memories

9.13[土]～11.9[日]

会場：企画ギャラリー〔7階〕
観覧料：一般1,200円、高大生1,000円、
中学生以下無料

主催：福岡アジア美術館、公益財団法人三谷文化芸術保護情報発信事業財団、西日本新聞社／共催：沖縄県立博物館・美術館／
助成：公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団、公益財団法人ポーラ美術振興財団／公益財団法人 花王 芸術・科学財団

ベトナムの激動の歴史から生み出されてきたイメージや記憶を、近現代の作品約110点を通して読み解きます。また特設コーナーでは、ベトナム絹絵の巨匠グエン・ファン・チャンの作品修復プロジェクト（三谷文化芸術保護情報発信事業財団）を紹介します。

TOPICS



出展作家のゴック・ナウとタオ・グエン・ファンをゲストに迎え、あじびにてアーティストトークを開催予定。その他、イベント情報はこちらをチェック！

Artist in Residence 2025



今年度は国内外から
注目される作家を7名招聘。
9月と2026年3月開催の
成果展にご期待ください！

初めて訪れる福岡は海に近く、日本の南、山に囲まれた街だと聞いています。この経験を通して、私のみならずオスのアートコミュニティの可能性が広がることを期待しています。

AIRTIST COMMENT

ウィリー・ザイウース Willie Xaiwouth



PROFILE 2001年生まれ、ラオス ビエンチャン在住。少数民族タイ・ユアン族出身のアーティスト。文化、自然、地域の知見に深く根付く作品を、絵画、写真、インスタレーションと多彩な手法で制作している。福岡では、ラオスと日本で伝統的に使われてきた竹を用い、両国の文化を織り混ぜるようなプランを提案。

「Fode」2023年

第1期 参加作家3組

・さまざまなアーティストたちに出会える「オープンな場」
・アジアや日本の「リアルな今」を知ることができる

モハマド・ファズル・ロビ・ファティック Md. Fazla Rabbi Fatiq



AIRTIST COMMENT

初めての日本です。福岡は穏やかで人懐こい、アジアと関わり深い都市と聞きました。能古島など豊かな自然に触れて、海鮮やラーメンも食べたい。慣れ親しんだ環境から距離を置くことは新たな視点で作家活動を捉えるチャンスだと思っています。



《Mirage》2023年

PROFILE 1995年生まれ、バングラデシュ クミッタ在住。写真を通じ、政治や社会の問題、ベンガル地方の忘れられた歴史と激動の今を伝えている。福岡では、語られることなく周縁に追いやられた現実を目に向け、何が「必要」とされ、何に「価値」が置かれているのかを問い直す。

あじび RECOMMEND

写真を通じて社会や人々の日常に向きあってきた作家。今回はバングラデシュ社会と福岡がダイレクトに繋がるような作品を制作することになりそうです。



《Home》展示風景 2020年



《Home》2020年

AIRTIST COMMENT

今回は自身の歩みを制作に還元し、これからの表現を広げる大きな挑戦です。いろいろな方と関わることを楽しみにしています。海外から参加する2人の作家には福岡ならではの「角打ち」を体験してあたたかな空気を感じてほしいですね。

馬場さおり Baba Saori

PROFILE 1978年生まれ、福岡市在住。自身の乳がん闘病体験を起点に、身体性やジェンダー、社会的マイノリティをテーマに写真作品を制作。研究者としても、女性写真家や台湾の写真文化に関する論考を発表している。



《The View Through My Blood〜今、私が見ている世界》2010年〜現在

あじび RECOMMEND

福岡在住の馬場さんは海外経験が豊富。他の2名をリードし、福岡の文化にぐいぐい引き込んでくれると思います。各々の作風に変化をもたらす「アートの化学反応」が今から楽しみです。



《その男 彭志維 (ホー・ン・ウェイ)》2021-2024年



<https://faam.city.fukuoka.lg.jp>

あじびニュースvol.97 2025年8月1日発行

企画・編集・発行：福岡アジア美術館 編集・執筆：後藤麻与、片桐絵都
デザイン：吉田朋史[9P] 印刷：株式会社四ヶ所

〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1リバレインセンタービル7・8階 TEL 092-263-1100
7.8F, Riverain Center Bldg., 3-1 Shimokawabata-machi, Hakata-ku, Fukuoka, Japan

ギャラリー観覧時間 9:30-18:00(金曜・土曜は20:00まで) ※ギャラリー入室は閉室30分前まで
開館時間 9:30-19:30(金曜・土曜は20:00まで) あじびホール、アートカフェ等
休館日 毎週水曜日(水曜が休日の場合はその翌平日、ただし8月中は無休)
年末・年始(12.26-1.1)

滞在作家たちの福岡での制作作品を発表します。

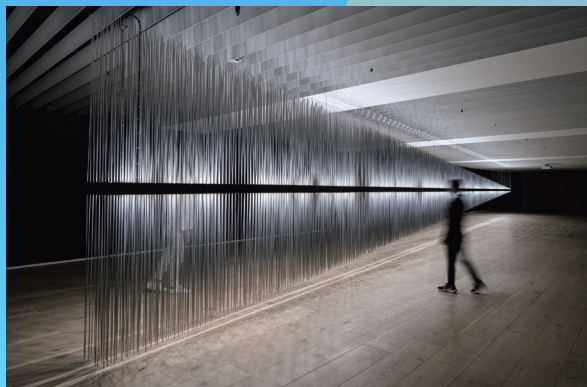
福岡アジア美術館 第24回アーティスト・イン・レジデンスの成果展

日時：2025.9.13[土]ー9.28[日] 11:00ー17:00 会場：Artist Cafe Fukuoka(中央区城内2-5)スタジオ、ギャラリー 休館：9.16[火]、22[月]入場無料

第1期成果展と同時開催

FaN Week企画

グランドスタジオ特別展示



ヤオ・ジョンハン

姚仲涵(台湾)による 光と音のメディアアート

FaN Weekイベントとして、国際的メディア・アーティストによる特別展示を実施。「光電獣」と命名された照明装置を使い、光と闇、そして無数の音からなる大規模なインスタレーションを展開します。

2025.9.13[土]ー9.28[日] ※休館 9.16[火]、9.22[月]
会場: Grand Studio(福岡市中央区城内2-5 Artist Cafe Fukuoka)
※成果展・特別展示は同じ会場

第2期

参加作家2名



ポートレート撮影: 伊藤留美子

進藤 冬華 Shindo Fuyuka

札幌市生まれ、札幌市在住。
これまでは北海道の歴史や文化に関わる作品を多数制作。近隣地域の文化的繋がりや近代の北海道を起点に、世界のからくりを見つめてきた。今回のレジデンスでは、近代に福岡から北海道に入植した移住者たちの歴史をもとに制作活動を展開する。



《過去をたどる家》2023年 撮影: スズミエリカ



《そうして、これらはコレクションになった》2022年

第3期

参加作家2名

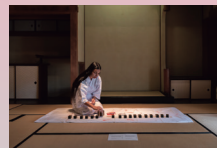


アルピタ・アカンダ Arpita Akhanda

1992年インド生まれ、
西ベンガル州
シャンティニケータン在住



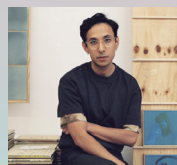
《Dendritic Data Series》2024年 撮影: Hampi Art Labs



《Transitory Body》2025年
撮影: Haruka Oka

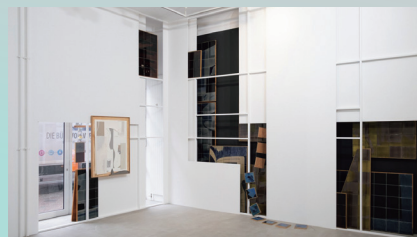


《懐かしい》2025年
撮影: Haruka Oka



小田原 ルーカス Lucas Odahara

1989年ブラジル生まれ、
サンパウロ/
ドイツ ベルリン在住



《Oh Hintergrund, tell me where to go now》2024年

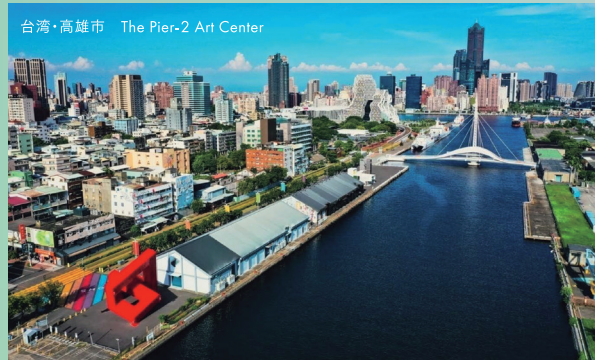


《Still Men》2022年



《Estranged from Sight》2024年

2025年の海外交換レジデンスは「台湾・高雄市」



台湾・高雄市 The Pier-2 Art Center



昨年度の韓国・光州市に続き、今年度は台湾・高雄市と交換レジデンスを実施。

The Pier-2 Art Centerは「前衛」「実験」「イノベーション」をテーマに旧倉庫群をリノベーションした複合アートスペースです。台湾作家1名を第2期に受入れ、福岡作家1名を高雄へ派遣します。

2期・3期作家の成果展は、3月末の「福岡城さくらまつり」に合わせて発表、アートと桜が同時に楽しめます。

Artist in Residence 2025



あじび RECOMMEND ラオスから作家を迎えるのは、実に21年ぶりです。24歳という若いザイウースさんの参加が、ラオスの作家たちにどういったインパクトを与えるのか楽しみです。



Fada 2023年

初めて訪れる福岡は海に近く、日本の南、山に囲まれた街だと聞いています。この経験を通して、私のみならずラオスのアートコミュニティの可能性が広がることを期待しています。

AIRTIST COMMENT

ウィリー・ザイウース Willie Xaiwouth



PROFILE 2001年生まれ、ラオス ビエンチャン在住。少数民族タイ・ユアン族出身のアーティスト。文化、自然、地域の知見に深く根付く作品を、絵画、写真、インスタレーションと多彩な手法で制作している。福岡では、ラオスと日本で伝統的に使われてきた竹を用い、両国の文化を織り混ぜるようなプランを提案。

今年度は国内外から
注目される作家を7名招聘。
9月と2026年3月開催の
成果展にご期待ください！

第1期
参加作家3組

さまざまなアーティストたちに出会える「オープンな場」
アジアや日本の「リアルな今」を知ることができる

モハマド・ファズル・ロビ・ファティク Md. Fazla Rabbi Fatiq



AIRTIST COMMENT

初めての日本です。福岡は穏やかで人懐こい。アジアと関わり深い都市と聞きました。能古島など豊かな自然に触れて、海鮮やラーメンも食べたい。慣れ親しんだ環境から距離を置くことは新たな視点で作家活動を捉えるチャンスだと思っています。



(Mirage) 2023年

PROFILE 1995年生まれ、バングラデシュミラ在。写真を通じ、政治や社会の問題、ベンガル地方の忘れられた歴史と激動の今を伝えている。福岡では、語られることなく周縁に追いやられた現実を目に向け、何が「必要」とされ、何に「価値」が置かれているのかを問います。

あじび RECOMMEND

写真を通して社会や人々の日常に向きあってきた作家。今回はバングラデシュ社会と福岡がダイレクトに繋がるような作品を制作することになりそうです。



(Hema) 2020年



(Hema) 2020年



馬場さおり Baba Saori

PROFILE 1978年生まれ、福岡市在住。自身の乳がん闘病体験を起点に、身体性やジェンダー、社会的マイノリティをテーマに写真作品を制作。研究者としても、女性写真家や台湾の写真文化に関する論考を発表している。



(The View Through My Blood〜今、私が見ている世界) 2010年〜現在

あじび RECOMMEND

福岡在住の馬場さんは海外経験が豊富。他の2名をリードし、福岡の文化にぐいぐい引き込んでくれると思います。各々の作風に変化をもたらす「アートの化学反応」が今から楽しみです。

滞在作家たちの福岡での制作作品を発表します。

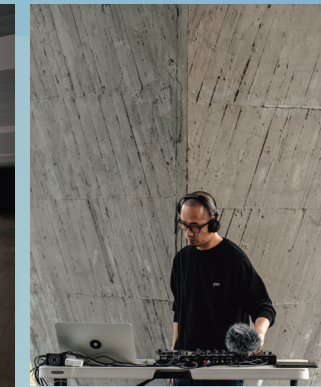
福岡アジア美術館 第24回アーティスト・イン・レジデンスの成果展

日時: 2025.9.13[土] - 9.28[日] 11:00 - 17:00 会場: Artist Cafe Fukuoka(中央区城内2-5)スタジオ、ギャラリー 休館: 9.16[火]、22[月]入場無料

第1期成果展と同時開催 FaN Week企画 グランドスタジオ特別展示



(ヤオ・ジョンハン) 2023年



姚仲涵(台湾)による 光と音のメディアアート

FaN Weekイベントとして、国際的メディア・アーティストによる特別展示を実施。「光電獣」と命名された照明装置を使い、光と音、そして無数の音からなる大規模なインスタレーションを展開します。

2025.9.13[土] - 9.28[日] ※休館 9.16[火]、9.22[月]
会場: Grand Studio(福岡市中央区城内2-5 Artist Cafe Fukuoka)
※成果展・特別展示は同じ会場

第2期 参加作家2名



ポートレート撮影: 伊藤留美子

進藤 冬華 Shindo Fuyuka

札幌市生まれ、札幌市在住。これまでは北海道の歴史や文化に関わる作品を多数制作。近隣地域の文化的繋がりや近代の北海道を起点に、世界のからくりを見つめてきた。今回のレジデンスでは、近代に福岡から北海道に入植した移住者たちの歴史をもとに制作活動を展開する。



《過去をたどる家》2023年 撮影: シクスエリカ



《そうして、これらはコレクションになった》2022年

2025年の海外交換レジデンスは「台湾・高雄市」



昨年度の韓国・光州市に続き、今年度は台湾・高雄市と交換レジデンスを実施。The Pier-2 Art Centerは「前衛」「実験」「イノベーション」をテーマに旧倉庫群をリノベーションした複合アーツスペースです。台湾作家1名を第2期に受入れ、福岡作家1名を高雄へ派遣します。

第3期 参加作家2名



アルピタ・アカンダ Arpita Akhanda

1992年インド生まれ、西ベンガル州
シャンティニケータン在住



(Dendritic Data Series) 2024年 撮影: Hampi Art Labs



《Transitory Body》2025年 撮影: Haruka Oka



《懐かしい》2025年 撮影: Haruka Oka



小田原 ルーカス Lucas Odahara

1989年ブラジル生まれ、サンパウロ/
ドイツ ベルリン在住



《Oh Hintergrund, tell me where to go now》2024年



《Still Men》2022年



《Estranged from Sight》2024年

AJIBI News vol. 97

あじび ニュース

展覧会を
面白くする
仕掛けとは？



2期・3期作家の成果展は、3月末の「福岡城さくらまつり」に合わせて発表 アートと桜が同時に楽しめます。

AJIBI Discuss

あじびのこと話そう

#04

展覧会の「仕掛け」

あじびのコレクション展は集合知

春と秋の2回にわたり、異なるテーマで所蔵作品を楽しめるあじびのコレクション展。4～6月に行われた春展「アジアコレクション この手が未来を編み直す」と、現在開催中の秋展「ベストコレクションIIIー変革の時代、新たな自画像」に込めた思いを担当者が語ります。

五十嵐(以下 五) あじびのコレクション展は、約5,700点の所蔵作品から単にピックアップして展示するというスタイルではなく、特別展のようにしっかりと演出する点が特徴的です。ここ2年で、テーマを設ける春展と、作家にフォーカスする秋展という構成が定着しましたね。

佐々木(以下 佐) 毎回違った形で見たえのある展示を構成できるのは、質・量ともに骨太な作品が揃っているからこそ。そして、一つひとつのコレクション展にここまで力を注ぐ美術館は、今の日本では珍しいかもしれません。
五 最近は空間づくりに使う予算を確保して空間デザインのコンペをし、外部のプロの力をとり入れています。昔は学芸員が図面を引いて、パネルもDIYしていたけどね。
佐 空間デザインや施工の専門家からは、学芸員だけで考えていても出てこないような発想やデザインの提案をいただくこともけっこうありますよね。展覧会ごとに作品の見せ方や空間の使い方が大きく異なるので、それも現在のあじびのコレクション展の見どころの一つになっていると思います。



「アジアコレクション この手が未来を編み直す」会場



撮影 長野聡

社会のうごめきから
生まれた熱量を空間ごと体感する。

SNS時代だからこそ身体的な経験を

佐 五十嵐さんがキュレーションを担当した春展は来場者の反応がとてよかったですね。
五 一つ前の秋展が映像やインスタレーションが多かったので、春展は作品の「もの」としての手ざわりを伝えられるように意識しました。じっくり見ていただけたようで、帰りに受付でわざわざ「すごくよかった!」と仰ってくださいる方もいらっしやいました。今までにない反応が見られて嬉しかったです。
佐 会場となるアジアギャラリーの全体、約1,000㎡を使って展開したのも、これまでとは違った試みでした。
五 こだわったのは身体的な経験となる空間づくりです。まずは小部屋に刺繍などの細かい作品を展示して、ぎゅっと近い距離で味わっていただく。そして天井の高い部屋に出ると空間がパッと開けて、作品との距離は遠くなり、キラキラしたり揺れたりしている複数の作品に包まれる。そんな風に、SNS時代だからこそ、その場所に来ないと経験できない展覧会にしかかったんです。

作家の「個」が引き立つ空間づくり

五 今開催している佐々木さん担当の秋展は、80～90年代に頭角を現した作家に焦点を当てていますね。
佐 この年代は、アジアの多くの地域で政治の自由化や経済の発展が進んだ時代にあたります。アジア美術にとっても「変革の時代」であり、西洋美術の模倣や古典の反復を超えて、アジア各地からそれぞれの地域の独自性を主張するような表現が登場してきます。自分は学生の時、この年代の中国のことを主に研究していましたが、状況がダイナミックに動いていく中から、さまざまなスター作家が登場してくる非常におもしろい時代です。今回出展しているファン・リージュン(方力鈞)も、この時代に頭角を現した一人。90年代には中国の作家も批評家も、自分たちの活動の価値を国際的な場で「プレゼンテーション」する意識を持つようになってくるのですが、彼は中国の現代美術が国際的に認知されていくうえで、非常にシンボリックな役割を果たしました。
五 空間づくりのこだわりは？
佐 いわゆるホワイトキューブ的な空間ではなく、動きのある壁を立てたり、作家ごとに明暗の差を出したりと、変化があって「個」が引き立つ空間を目指しました。



佐々木太輔(学芸員)

「ベストコレクションIII」準備中の会場



展示風景(ハン・ティ・ファム)



展示風景(ヘリ・ド)



展示風景(ナグジョード、ラジクマール、シャンティバイ、ガスラム)

コレクション展 Collection Exhibition Best Collection III ベスト コレクションIII 変革の時代、新たな自画像

7.5[土]～11.30[日]

会場:アジアギャラリー(7階)
観覧料:一般200円、高大生150円、中学生以下無料
主催:福岡アジア美術館

スター作家の傑作が一堂に会する「ベストコレクション」展。展示面積も作品点数も過去最大規模となる第3弾では、1980～90年代に頭角を現した作家を中心に、11組による作品を出展。アジア美術が躍進を遂げる時代に生まれた名作の数々をご覧ください。

五 一人の作家の初期と近年の作品を同時に見られるのも面白いところですね。例えば、ウォン・ホイチョンが89年に描いた《粛清》と09年の映像作品《暗い穴》は日本占領下のマレー半島における華僑粛清という同じテーマを扱っていますが、時代を経て見方が大きく変化していることがわかる。作品が宇宙に漂う一点としてポツツとあるのではなく、歴史的な流れや社会の広がりの中に位置づけることができるのもあじびの強みだと思います。どんな社会の中でうごめいてその作品が生まれたのかも含めて解釈しないと、本当の意味での「美術」は見えてこない。今回の秋展は、アジア美術を通して美術の概念を問い直すことに繋がるんじゃないでしょうか。
佐 「自身のアイデンティティとは何か」「西洋とは異なる自分たちの独自性とは何か」といった時代の問題意識が、会場のあちこちで感じられるのではと思います。力のある作品が揃っていて一発一発のパンチが重いので、一度見ただけでは消化不良になるかもしれませんが、その重厚感も含めて楽しんでいただけたらいいなと思っています。

特別企画展

ベトナム、記憶の風景

記憶とは、ふとフラッシュバックしたり重なり合ったりするもの。
ベトナムの歴史や記憶をめぐる時間軸は直線だけでは語れません。

植民地支配と急激な近代化、二度の戦争、南北統一と難民の発生、経済開放とグローバル化。あらゆる課題を絶えず経験してきたベトナムの歴史は、現代世界の縮図とも言えます。ベトナム戦争終結50周年を迎えた今年、近代から現代までの約100年間のベトナム美術作品を集め、これまで可視化されることのなかった激動の歩みを浮かび上がらせて。記憶とは、ふとした時にフラッシュバツ

クしたり重なり合ったりするもの。決して直線だけでは語れないこの国の、時に痛みを伴う歴史や記憶を伝えるため、作品の並びはあえて完全な時系列にはしていません。展示の構成は、第1章～第4章に分かれ(※)、例えば2章では、ベトナム戦争時代にベトナムの作家によって作られたポスターや写真とともにディン・キュー・レの現代美術も紹介しています。戦火を逃れるために10歳でベトナムからアメリカに渡った彼は、ハリウッド映画

などで描かれるアメリカ的視点のベトナム戦争に違和感を覚え、ベトナム戦争の象徴的な存在である米軍のヘリコプターを皮肉を込めて作品の中に登場させています。惜しくも2024年に急逝しましたが、ベトナム現代美術の発展に大きく貢献した彼の思いは、未来を眼差すきっかけを私たちに与えてくれます。

日本人コレクターが集めたベトナム美術には、
ベトナムの風景に自身の思い出を重ねるような特別な思いを感じます。

第二次世界大戦中、日本はフランスとともにベトナムを支配し、60年代半ば～後半にはベトナム戦争に反対する反戦運動が盛り上がりました。そして近年は政治、経済、文化などの幅広い分野で友好関係が築かれ、日本には多くのベトナムの方々が暮らしています。時代ごとにさまざまなかたちでベトナムに関わってきた日本人の中には、ベトナムの風景に自身の

思い出を重ね、特別なシンパシーを抱いてきた人もいます。本展では、日本人コレクターからお借りした美術作品も展示します。個々の作品の素晴らしさだけでなく、二国間の人々の情緒的な繋がりも感じることができるはずです。
今、みなさんが思い浮かべるベトナムはどんな姿ですか？ 美味しい食事、活気あふれる市場、高温多湿な気候などで

しょうか。本展で描かれるベトナムの情景はもっと複雑で多面的です。ベトナム人作家が模索した理想の祖国、力強い人民の姿をアピールするポスター、都市の変化と人々の遅さを捉えた立体作品、個人の秘められた記憶から歴史を語り直す現代美術。多様な作品を通して、ベトナムのイメージに新たな魅力が加わることを願っています。



ディン・キュー・レ《南シナ海ビジュン》2009年、アニメーション



ゴック・ナウ《静夜一月曜日》2021年、アクリルシートに印刷された写真、木、ライトボックス

(※)展示構成

- 第1章「理想一描かれた祖国のイメージ」
- 第2章「熱気一駆け巡る戦場のリアル」
- 第3章「発展と郷愁ー変わりゆく故郷のすがた」
- 第4章「追憶ー歴史を携えて生きること」

特別企画展 ベトナム、記憶の風景

Special Exhibition Vietnam, The Landscape of Memories

9.13[土]～11.9[日]

会場:企画ギャラリー(7階)
観覧料:一般1,200円、高大生1,000円、中学生以下無料

主催:福岡アジア美術館、公益財団法人三谷文化芸術保護情報発信事業財団、西日本新聞社／共催:沖縄県立博物館・美術館／助成:公益財団法人三菱UFJ信託地域文化財団、公益財団法人ボーラ美術振興財団／公益財団法人 花王 芸術・科学財団

ベトナムの激動の歴史から生み出されてきたイメージや記憶を、近現代の作品約110点を通して読み解きます。また特設コーナーでは、ベトナム網絵の巨匠グエン・ファン・チャンの作品修復プロジェクト(三谷文化芸術保護情報発信事業財団)を紹介します。

TOPICS



出展作家のゴック・ナウとタオ・グエン・ファンをゲストに迎え、あじびにてアーティストトークを開催予定。その他、イベント情報はこちらをチェック!



未原みづ(学芸員)

ルオン・スアン・ニー《読書する若い娘》1940年、油彩・画布